迦具土

躬治作

成美繪

白鳩社藏版

迦具土

迦具土のその血たばしれ人の世の湯津磐村
は苦むしにけり

人の世に神の世つがじものならば磐裂根裂
裂きほろぼさむ

火産靈はわが世知らせりわが詩もいで新し
き生命ありこそ

こたび、白鳩社成れり。こは、肝合へる文學家美術家の小團體なりとか。まづ、わが詩集をと、思ひ立ちたりげにて、はやう編輯して、持ち來りぬ。かくて、一たび、わが承諾と、選閲とを經むとなりけり。あながちなる慫慂に、えも拒みあへずてなむ。

題は、わがおほせにたるなり。これを、古事記にあさりて、迦具土をしも得たりけるは、わが性の、それに近かればにや。血熱涙などの、この神に關繫あるは、言はずもなれど、さまでの思ひよせあるにもあらず。されど、師承なきわが詩には、猶且、若き生命もあらむか。

この集に載れる歌の數は、凡て、二百九十九首なり。明治三十年以後のわが作、大やう、二千首にも餘りたらむ。そが中よりえらび出でたるを、更に、自らえらび定めつ。わざと一首を洩して、三百數に充たしめざる、心なしとにもあらずかし。未來は杳たり、われ、長へに老いじとぞ。

明治三十四年五月初雷の日

駒込の里　躬治

かぐづち

一

服部躬治作

君見ませ折る人無みに歳を經し野茨
の花のここちよげなる

天地の間に滿てる情ありよし人皆は
つらくもあらなむ
つらかりし憂かりし冥闇の手ばなれ
てわが世樂しき朝ぼらけ哉
貴人(アテビト)は誰よりうけし勢力(イキホヒ)ぞわれに詩(ウタ)
あり神の授けし

二

相生の松とはならじ幾世かけて君と
二人は一本の松

三

君がためすてむ命を朝夕にかくいた
はるもただ君がため
もろともに死なむの契全(マタ)くあらばい
ざ百年の齡保たむ

手すさびにをりたる紙の鶴すらも飛
ばむとすなり春の初風

年頃を除目にもれて老いぞれし博士
が家の鶯の聲

法皇の御腦平癒の朝ぼらけ院の飼馬
とみにたふれぬ

御簾の外に内に透額透扇管絃の御遊　五

午すぎにけり

うちわたす柳蜻の夕時雨牛追ふせな

が簑のみじかき

わがせこよわれを思はば今日のみは

馬に鞍おけ霜どけの道

梅も見ず柳も折らずこの春を亂れご
こちにわれや過さむ

この春はさても過さむ來む春もまた
こむ春もかくや過さむ

かくしつつわが世終らむ君ゆゑにわ
れは世にありただ君ゆゑに

今はさは君にまかせむ君ゆゑに若き
命のおきどころなき

吾命（ワギノチ）の全けむかぎり戀ひ戀ひて在ら
むか君を見ずて死ぬとも

戀ひ戀ひて死なむもよしや君が名は
時じく胸を離れざらなむ

山に入りて山を出でけむ牟尼佛の無二の光を燿かせ君（近角文學士の送別會に鉛筆もてかいつけやりたる）

尊げにいます佛の箔を剝ぎてもとの姿を見ばやとぞ思ふ（西福寺の阿彌陀佛前の低吟）

法華經の辻提唱やいかなりし目にたちけむな隆き頰骨（日什上人の傳を編まむのをりに）

八

繪扇にかくすとすれどなかなかにこぼるるものか君が微笑（ホホエミ）

紅の裾曳きなせる露原の戀の中道月は出でにけり

弱肩にたけなる髪をはららかし褄とる君が湯あがり姿

九

賣られたる畑とも知らで梅の花ゑみ
こぼれたる見ればあはれなり

人げなき長屋の軒に夕日さし梅の花
散りぬ塵塚の上に

追分の石こそなけれ梅が枝に花ある
方を南と思はむ

一すぢの小道の末は畑に入りて菜の
花一里當麻寺にまで

一村の家はみながら川に沿ひて沿へ
る垣根は山吹の花

嫁げりし一の娘の宿とへば桃は散り
にけり散りて無かりけり

薄羽織疊みてをれば掛茶屋の前の桐
の樹蟬の來て鳴く

人あまた垢離（ゴリ）とりゆきし夕川の河原
柳になほ蟬のこゑ

富士道者つらなりわたる並木路の並
松が上に蟬鳴き噪ぐ

富士百首（節錄）

明治三十一年八月二十一日登山吟

手に撫でて神世の昔わが問へば巖も
の言はずただ風に吼ゆ

この山しまこと扇の形ならばここや
要（カナメ）のあたりなるらむ

ここにしてわが吹く息の狹霧より八
州の野に雲滿つらむか

火を噴かむけはひもあるを靜なる山
の姿と誰か見るらむ

足下にはたたく神の聲すなりなゐか
ふるらむ四方の國原

見かへれば雲より外のものもなしい
づこより來しわが身なるらむ

よぢていなば天知るべきをいづの世
にとだえせりけむ雲の棧橋

白雪をかざみにかめば鐵のわが骨輕
くなりにけるかな

わが心今ぞたらへる家に在りてよそに仰ぎし天雲の上に

かぐづちの血しほやここにたばしりし五百津磐村煙わきのぼる

手をのべて取らばやとしもおもふ哉ななめになりぬ北斗七星

文机に載せて見るべくこの山の形に似たる石や拾はむ

高らかに歌ひて居れば白雲のわれをはばかりて遠ざかりゆく

富士が根に煙はたたず然れども底の思ひはもえまさらずや

麁朶折りて君待ち酒やあたためむ雪

車唄きこゆはや近づきぬ

雲はれぬされども惜しき別れ哉わが

せの船は今日ぞ湊を

わがせこよ竹の子笠を召させずや霰

かさても風寒からむ

夕づく日とすれば葦にかぎろひてし

ぐるる中を君が船行く

しかすがにいそぎもやらず君まちて

待ち暮したる歸るさの道

旅籠屋の軒の榎に目じるしの笠かけ

をれば鵙の聲する

安房歌

安房の方言を入れて
明治三十三年八月作

鰹船となりの濱につきぬとかアデわがせこ
は歸り來まさぬ（アデはなぜなり。何故の意）

わがせこの歸りのほどのおぼつかな伊豆べ
のあたりカンダチわたる（カンダチは雷鳴）

キシ雲の低く垂れたるあかときをシャンスヤナ行
く呼べど答へぬ（キシ雲は雨雲。シャンスは情人。ヤナは畑の中道）

夕月夜潮さしよどむ里川をウナメコテノシうち連
れて渉る（ウナメは牝牛。コテノシは牡牛）

ただフトリ夕のノワにせこ待てばシノベさやぎて
雨ふりいでぬ（フトリは一人。ノワは庭。シノベは篠竹）

足袋もめさず草鞋も召さず沓もめさずカマヱビと
ると蛇に嚙まるな（カマヱビは野葡萄）

松ゴナの中にまじれる妹背貝妹も拾ひねわれも拾
はむ（松ゴナはこぼれ松葉）

鮪釣りに行かゑしせこの歸るべみアサデのイナサ
ただならぬかな（アサデは朝げの意。イナサは東南の風）

カモヤ縫ふ針の先こそおぼつかなナヤムなわがせ
やがて慣るべし（カモヤは窄袖。ナヤムは叱るに同じ）

亡き母のおくつき淋しハナノ木を根こじてこむか
ここに植うべく（ハナノ木は櫧をいふ）

珍しく米飯炊きて火を消ゑしヒドコにはやもこは
ろぎの鳴く（ヒドコは竈）

夜はアエルヅシに鼠のこゑはやむ裏のテヤウラ日
は高うなる（アエルは明ける。ヅシは天井。テヤウラは平地なり）

いと早も歸れるものかわがせこが釣り來し鰺の數
はイウラぞ（イウラはいくらに同じ）

一杯の美酒（ウマザケ）のみてまづ醉はむ見よ妹ここに鰺のヒ
ヤウバを（ヒヤウバは百ばかりの意）

歸り來むせこまちがてら磯に出でて
海士が新妻星祭りする

虫飛んで燈火消えし方丈の闇のいづ
くぞ芭蕉葉の音

紙燭して人に逢はむのいざよひに松
風やみぬ虫の啼きにけり

知人(シリビト)に傘はあづけて歸るさを野路にとりけり春の夜の月

何となくむかしに似たる春の夜を君が歌誦してあかしつる哉

春の夜に野をたちくればしらじらとあらはれ初めぬ帶の如き河

高樓(タカドノ)の婚禮(トツギ)の場(ニハ)の謠やみて花一しきり燭の上に散る

おぼろおぼろ月影かすむ梅壺に『命婦のおもと』妻よばふなり

亡き父に似たる翁と語りけり初瀨の御堂の春の夜の月

一人子を都にやりてその日より茶賣
り花賣り今ぞたへえぬ

ともかくも泣く子すかさむわが夫(ツマ)の
おそき夕を春の雨ふる

小雀にやる餌は母にもらひたり春の
夕のなど暮れおそき

明日知らぬかりの宿とは思へどもさて寐心のよき今宵かな（寓居を移しける時）

君が手に觸るべき貝のかたかたを羨むらむよ貝のかたかた（人に貝を贈りけるに歌を書きて）

十年經し今日を昔にかへしませ見ませ饗けませわが名わが歌（佐々木弘綱翁の十年祭に）

わがせこがあらがね堀りにゆきまし
し足尾遠山山ほととぎす

身の代(シロ)の金を抱きてかへり見る廓の
のあたりなく郭公

關守に關とめられて關札をただされ
居ればなく時鳥

島に在るせこを夢みてわれ知らず身
ふるふ夜半をなく杜鵑

皇子(スメミコ)の及に伏して身失せたる夕より
啼く菟道郭公

わがせこが遺物(カタミ)の髪の屆きたる雨の
夕をなくほととぎす

わが心おぼつかなくもなりにけり誰
そ誰そ早くいかにとかせよ

さりともといくたび思ひかへしけむ
思ひかへしてなど頼めけむ

あやなくもわれをのみこそたのみし
か今はたわれをせむすべもなき

かにかくに成らむ成らじはいはずし
て年の緒永く戀ひばいかならむ

とても世に遇ふべき身とはおもほえ
ずむしろわが名を戀にすてなむ

ゆくすゑの事は思はじあらかじめか
くと知りなばわが戀やまむ

この頃の村の田唄をきかせずや今は
わがせよわが妻と言へ
ととのはぬ節の小唄の末きえて温泉(ユヤ)
宿(ド)の夕蛙鳴きたつ
一しきり夕だつ雨のさわめきて白鳩
むれく繪馬堂の屋根に

初螢おひてとらへて手握(タニギ)れば手握る
ままに手間(マタ)光る
伽羅の香をこめしすずしの蚊帳の中
に迷ふ螢のあはれなるかな
天地はこもりてけむな夫(セ)の君と君と
並べる新室(ニヒムロ)のうちに（結婚せる人に）

相識らぬ人なりながら何となくただ何となくめで
たかりけり（人の還暦の賀に歌召されて三首を）

めでたさの限と思へばなかなかに君
をいははむ言の葉の無き

言の葉の無きに任せていははましあ
なめでたしの君が齢や

はかな事なほわが胸を去りもあへず月雲を出でぬ
舟隈に入りぬ（若溪に舟を泛べて月を觀ける時）

知らず去らず通りかかれり見おぼえ
のなきにしもあらぬ松たてる門

のぼり坂のぼりはつれば村ありて村
の中道山祇の道

春風の堤にたちて柳折るうしろ姿よ
君かあらぬか

鳥飛んで窓に入りつる夕よりあやし
わが子のものぐるほしき

旌れし孝子が麥は莖(クキ)たちて朝日のど
かに霜けぶるなり

芭蕉葉の卷葉の中に人知れず書かば
や君にやらむとせし歌

詩(カラウタ)を一たび誦(ズ)して牖によりて芭蕉の
上の雨を聽くかな

芭蕉葉の葉ひろきかげにかくろひて
この夕ぐれの月待ち居らむ

若やぎし聲朗詠となりにけり近衞づかさの春の夜の月

女の童誰そやの聲なおこたりそ前裁合更闌けにけり

唐衣に袖扇はわれのみかおぞや内豎の人見知りせぬ

夕月夜笛の音止みて中門の櫺子の外に人のけはひあり

『火危し』やや遠のきておぼろ夜の月靜なり縫殿の陣

賭弓のをへつる後を蟬鳴いて左近の馬場に日は斜なり

凝り成せる豐旗雲の凝りあへぬすこしの間に富士の遠山（明治三十三年八月安房の海邊に滯れるほど）

鰹船かへらふ浦の潮ざゐに風は和ぎにけり月は出でにけり

待ち待ちしせこはかへりぬさし曇りすこし曇りて神鳴る夕

磯ぶりのふりのまがひによき貝のうつくし貝を見失ひつる

名も知らぬ貝なりながら拾ひとりてわがものとすればめぐし美し

遠富士は闇のあなたに月かげは闇のこなたにわれは殿戸に

ほしいままに人に下ぐべきものならず頭高きは自(オノ)
然(ジカラ)なり（壁に落書したる）

筆把りてたたむ世知らず亡き父の恩
賜の墨を市に賣りつる

世にたたむ望をすてて月の夜を酒に
對へば酒の冷たき

秋草の歌を召されてその日より呼び
名となりぬ桔梗の内侍

いづれにもまじる色あり白桔梗むし
ろ紫こむらさきなれ

堅文(カタモン)の狩衣姿ただ一人桔梗咲く野に
たそがれにけり

挽歌五十首（節錄）

幼友とちなりける人の結婚の約ふみもあへず身まかりたりと傳ひ聞きて

新しく縫はゑし白の晴小袖しつけもとらでいにし君はや

紅の君が唇一たびも夫の君を呼ばずむすばりにけり

石床にたけなる髪をなびかして君やいづまで眠りますらむ

朝夕に君がとり見し粧飾室の櫛笥の塵は誰か拂はむ

よしさらばわが目なかひを離るるな昨日の君が振袖姿

人形の衣の肩揚心ありてとりけむ君
をなぶるすべもなし

小指もてとかさむ君はいまさぬをつ
れなし皿の紅の色濃き

黄泉なる高きにのぼりかへり見よこ
こに人あり君を戀ひ泣く

少女子の手よりのがれて轉びゆく鞠
のゆくへを逐ふ小犬かな

小松原とほり過ぐれば岡ありて岡の
一つ家君のいますところ

添文(ソヘブミ)の文字は女の手なりけり今朝屆
きたる木犀の花

ほのぼのと篝しらみて白みゆく敵の砦の櫻散るなり

又しても嵯峨の櫻の花吹雪牛飼舍人後れ來にけり

見かへればわが影のみぞのこりける電氣燈照る花の下道（上野に花見してのかへさ）

芝原にはつはつ萠えし若草を蹈まじふまじと子らのありける（なにがしの園遊會にて三首）

少女らはおもき裳裾をかいごりてまた築山をひとめぐりせり

振袖をしぼッて肩にかけし子のおりて汲む見ゆ姫の井の水（姫の井は紅葉館庭内にあるいさら井）

親のため杖にきるべくわが植ゑしくれ竹の雪は誰かはらはむ（明治三十一年に詠める雪百首の中）

居酒屋のほかげにたちて賤の男がかぞふる錢に雪ふりかかる

庭の雪にかかりやせむとこの朝げ疊の塵もはらはざりけり

雪ふみて紙屑拾ふ幼子の家をし問へば家は無しといふ

雪の中にたちて物乞ふ巡禮の笈づる見れば親は無かりけり

たそがれし村のはづれの杉酒屋杉の玄るしに雪ちりかかる

轅(ナガエ)おろす音の聞えし大殿の門の内外
に松の花散る

錢乞ふとわれにすがれる乞食の顔相
見れば憎くしもあらず

ありがよひ見し穢多村の堺松片吹く
風を今もきかむとは

門のべの銀杏の若葉朝なさなわれに
ささやく秘事や何

緑なる芝生の隈となりにけり痩せし
蒲公英肥えしつわ蕗

露ふくむ背(セ)低楓(ヒクガヘデ)に袖觸れてあなや心
のさわめきにけり

夕日花やかに海棠いたく亂れたり唐畫の如き庭石のあたり

誰にやるものとはなしに摘みためて花束結ひつ菖蒲公英

蝶をりをり離るる見れば蒲公英の花の末吹く風もあるらし

房州百首（節錄）

明治三十三年一月作

さざ波のよする荒磯のつぶら巖世のあざけりも知らず顏なる

海宮（ワタツミ）のかくろひ事をもたらして沖つ白波われを訪はなむ

浦の名をうなゐに問へば知らざりき
少女に問へば羞ぢて答へぬ

たどりゆく浦おもしろみ浦の名をわれ試みに附けむと思ひつ

うるはしき安房の七浦夏ならば一浦ごとに潮浴ましを

磯近き海人が軒端に雞鳴いて潮ごりがたの日は斜なり

磯山を下りはつれば岩かげに名無し佛のたたせ給ふよ

海人の子に海人唄一つをそはりて夕磯端をうたひつつぞくる

心ゆく海のながめや家にありて小き
洲濱など作りけむ

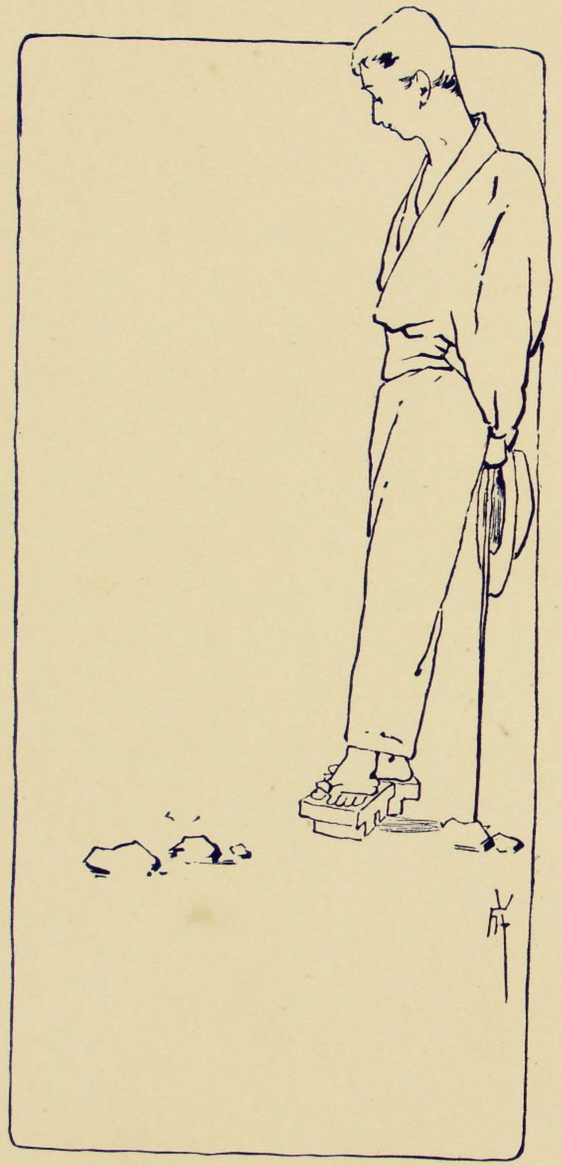
干網のかげ隈おほき夕庭に茶の花あ
さる鷸鳥の聲

夜をのこす磯山松の梢よりおろす羽
ぶきの鷹めける哉

鮮きかをりみちたる磯端をさまよひ
をれば夕日くもりぬ

鴫のゐる中つ洲あたり雲はれて夕日
の中に鷹おろしくる

ここもとに波ただよりこごむ靴の都
の塵はいまだとれずあり



はかな事胸に浮びて磯に立ちてとか
くする間に潮のみち來る

しづかなる雲の心も動くべし世を憚
らぬ濤の狂ひや

あさ潮に嗽口し居れば岩蟹のゆくへ
もしらに驚きはしる

荒磯にくだけてわれて散る波を汲み
こ海人の子口嗽ぎてむ

磯ありきわれに集ふ子今朝見えず親
や病みけむ否さにはあらじ

沖つ波ここにより來ね邊つ波はなほ
世の中のひびきならずや

荒波のさわぐ茱萸島柑子島玄ましく

人を忘れて向ひつ

海の音夜を離れて磯山の松の葉さや

ぎ日はいでむとす

岩が根を枕となしてまどろめばゆく

らゆくらに波の音のする

自在かぎ煤にまみれて茶盆茶碗茶澁

に古し古き掛茶屋

ほの白き扇遣ひの見ゆる哉木の下闇

の掛茶屋のうちに

相客となりし昨夜の人も亦駕を出で

たり富士見ゆる茶屋

桔槔（ハネツルベ）きしる音して菜の花のかをりほのかに月明りあり

峠路に今ゆき合ひし巡禮の唄は霞の中になりぬる

朝雲は雨ともならではれにけり山路一里ただ雉子の聲

鶯に今日も菴を任せおきてひとり麓
に枯枝ひろはむ

數寄屋には人いまだ見えず鶯の窓を
覗ふ影ばかりにて

孫が手もからで佃りし山畑の麥生穗
ばしり雲雀なくなり

猪うちてかへれるせこの笠を簑をう
くるわが手に春の雪ちる

新懇の村の中道いつの朝もわがせま
づ着く草鞋の跡

石曳くといそはく坂の上り口日は照
りながら霰ふるなり

幸に人と生れて幸に君と相見つ死な
むともよし

世に厭きてただこのままに死なむと
も君し忘れぬわが名なりせば

かりそめに執りたる筆も君が名を書
きての後は捨て難くして

われ知らずうちほほゑみてわれ知らず庭のしげみに隠れつる哉

葉櫻の陰去りあへず物おもへばそや何とも知らぬ音あり

さりともと思ひかへしてさらにまた同じ思ひをくりかへすかな

世の耳の聾ひもやすらむ試みにわれに聲貸せ書の上の君（日蓮上人の開目抄を讀む）

金箔の剝げかかりたる羅漢だちなつかし今に媚びむともせぬ（本所の五百羅漢寺にて）

九品蓮華一品缺けて數足らず足らなく足らす觀世音菩薩（房州富山に登りける時）

五十歩に足らざる藤の下ありき歩きのこりは池に向はむ（柏壁の藤見にゆきて三首）

少女子は日傘疊みて藤棚の藤のえだりをわけ入りにけり

藤棚に春の夕日のかぎろひて小池にゆらぐ花房のかげ

まむかふに藁葺屋根の見えながらいく曲りするらむ小田の中道

垣根おほき田端の里のくねり道青葉が中に君が聲聞く（友と夕逍遙して）

牛の聲遠く聞えて里川の瀬よわき水に桐の花浮く

雨霽れし青葉若葉の葉ゆらぎに根無し筑波のかつ見ゆる哉

卯の花の垣根を繞るいささ水いささか月の影ほのめきぬ

新しきすずしの蚊帳の蚊帳越しに見る夕立のはれがたの月

ここちよく夕雨はれし葉櫻の山に月あり月に暈あり

醉ひ泣きし夜頃ぞ今に忘られぬさりとも君がおもはくのうき（人の許へ）

古菴の古きを温（タヅ）ぬ君住めば常（トコ）新しき松風の聲（米甫子新居に茶風呂を据ゑたり）

松青しわが世のかぎり青からむ青かれ風の吹きにふくとも

試みに問はむ昨日の春の夢今はたさびし松風の聲

櫻散りちりの進みに人老いて松風高し山の中村

かたゐらのかりそめ小屋の菰庇久し

く松の風に堪へよとぞ

松並木はつれば空はたそがれぬ風も

吹きいでぬ笠かたぶけむ

わが世思ふ思ひの半月はいでぬいで

秋風も松に吹き合ひね

秋風に胸は吹かせじこの胸は君が情を秘めおける胸

朝戸出のこの秋風を一人うけて君があたりは吹かせずもがな

世は廣し廣しといへど情もて情にかへむ君はただ君

なにがしの長者の屋敷跡古りて草井のあたり梅ひとり散る

白梅の香をなつかしみたちよれば主は太刀を拭ひながら居り

碓(カラウス)の音のたえまに梅ちりて門川のほとり風ゆるく吹く

道のべにとりすてられし唐薺からく
も花の咲きにけらずや

戀知らで失せし少女の塚のべに今年
はじめて桃の花さく

牛叱る聲の半ぞかくれたる一むらつ
づく桃のはやしに

若水はえこそ汲まざれ波の音のあらき海邊にわれ
幸くあり（海濱に新年を迎ふ）

魚喰ひに猿の下りくる道ならし山の葛の岸に垂れ
たる（富士川を下りて）

道のべの楢の大樹を離れたる鳥のゆくへは伏して
見るべし（靈山に登りける時）

天神の社の額の數の中に昔のわれを見出でつる哉（歸省の作五十首の中より）

蟬さしのかへさかへさに宿かりし仁王の腕は無くなりにけり

清書の日毎に筆をそそげりし川の形よいつかはりけむ

いざ今日は幼くなりて父君の繪皿の蠅をはらひて居らむ

母君の手づからむきて賜ひたる林檎の味はすずしかりけり

里の子の顔は知らぬがおほけれど耳にせし名の無きにしもあらず

亡き人のあみてのこゝし靴たびの足
にあはぬもうらめしの世や
燈火にわざと背きてたたむ哉君が遺
物の衣一襲ね

なまじひに卒塔婆の文字を讀まざらば涙止めむす
べもあらましを（竹馬の友の墓に詣でて）

まま事の昔の友の名なりけり薄が中
のおくつきどころ

一もとの槐たふれて岩かげの不動の
劔は缺けしままなり

夕月のをぐらき合歡の下かげに湯浴
みし居ればなく時鳥

山雀の水はありやのたゆたひに雲の
ゆくへを見失ひつる

月清み寐がてにをればわが蚊帳の裾
にきて鳴くきりきりす哉

すずしさの果を知らせて夕ぐれの空
のあなたに月あはくあり

夕まぐれそぞろありきに虫買うて家
にもどれば月も出でにけり

蚊の聲の悲む夕軒に出でて痩せたる
月の影を見るかな

歸り來む父待つほどの慰めに母無し
子らは蚊遣をぞ焚く

茶を乞ふと憩ひがてらにいたはりつ
雨にやつれし大和撫子

雷落ちて片焼けしたる大樫の洞(ウツロ)に咲
けり撫子の花

庭の隈はややたそがれて錆竹の小椽
にのぼる紫陽花の影

めでたしと言ひてほがむは事古りぬよしそれとて
もめでたかりけり(人の婚せるにいひやりける三首)

あらためていはじほがじ今ゆ後も
君が幸福(サキハヒ)いのるばかりぞ

天地の神に祈らむ天地の神ぞしらさ
む君が幸福

たわみ伏す日蔭の萩をいたはると遂にたたみぬ蛇の目傘（百花園偶成六首）

傘をたたみておきてややしばし去だれる萩の花に頻ずる

傘を君にさしかけ君が手に折らせてしがな小萩糸萩

君とわれと各襟にさし合はむその日は知らず白萩の花

この枝に或は君も觸れつべしうねりなかへそ糸萩の花

一めぐり池をめぐりてもとめ得ずこれをとおもふ白萩の花

君が手に折られし花を白萩を心あるごと
思ひきわれは（人の許へ）

廣椽に姫のたたして見給ふよ狆の狂ひし
霜の上の跡（家の會に題を探りて）

傾ける茅が軒端の釣りしのぶつられ
ながらに秋たちにけり

道のべの草にすがれる老蝗何に命を
つなぎとめけむ

霜白き松の梢にただ一葉命のこせる
蔦紅葉かな

尺に足らぬ小さ佛の並べるよ小き慈悲を
人にくばるな（駒込大觀音にて）

神ありと何たのめけむ神なしと何恨
むらむ何嘆くらむ

人知らぬ涙ありとは神ならでああ神
ならで誰か知るべき

天地の神の保てる命なれば死ぬとも
われは死なじとぞ思ふ

昨日わが折らむと思ひてさて止みし
薔薇の白きは散り果てにけり

朝風のそよめく庭の芝の上に動かぬ
影や何木なるらむ

子は嫁に孫は兵士にとられたり木樵
り柴苅りわが世をはらむ

命あらば命あらばとたのめてもたのめてもなほ悲しかりけり（遠き國へ旅立つ人を送る）

去る者は日々に疎しと聞くぞうきされどもわれは君をたのめむ（親しかりし友の京を去るに）

相見てはなかなか胸の迫る哉言はず泣かずにわれや別れむ（逢はまほしかりける人に逢ひて後別るとて）

釧（カンザシ）の落ちたるらしき音ありて馬道（メドウ）のあたり月おぼろなり

思はずも櫛蹈み折りぬ御社を退出（マカヅ）る夜の花かげにして

あけぼのの隣の離宿の庭柳は霞み蕗の葉は雨

うかせたる椀の三つ葉はこはれどさ
すがに春は白魚の味に

根分けせし昨日の菊に今日の雨この
まま手をば入れでさしおかむ

あたたかき君が玉手に掬ばれてあと
なくとくる春のあわ雪

わがためと妹がつみこし初若菜みづ
みづしくも春にあへよとや

目ざませと妹がよぶらむここちして
聞きすてかねつ鶯の聲

朝庭の小草のしめり目にたたず妹や
草履のはきごこちよき

月の三十日母の手からず桑も買はず
とりしこの繭君が衣料(キヌガヲ)
鶯の小き口に紅さして聞かばいかな
らむ春のあけぼの
春雨の柳はなれて河岸傳ふ君が車の
靄ごもりゆく

金屏に夕日かがよふ長橋の局の留守を秋の風ふく（秋風に屏風を詠み込めて歌作れと人のいへるに）

貴人の殯（モガリ）の場の樂やみぬ屏風の外は秋風の聲

六尺の屏風の紙はかつ破れて土佐繪の松に秋風ぞ吹く

妹が世もわが世も知れと根こじきて
植ゑし小松に美名（ヨキナ）おほせむ

紙鶴を妹にあつらへ鶴の背に息吹き
入れて飛しても見つ

かぐづち　をはり

明治三十四年六月廿八日印刷
明治三十四年七月一日發行

編輯兼發行者　市岡傳太　牛込區神樂町三丁目三番地
印刷者　野村宗十郎　京橋區築地三丁目十五番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　京橋區築地二丁目十七番地

不許複製

發行所　牛込區神樂町三丁目三番地　白鳩社
大賣捌所　神田區表神保町二番地　東京堂
木版彫刻者　吉田六三郎